

なかはざま

中狭間遺跡 (本発掘調査A)

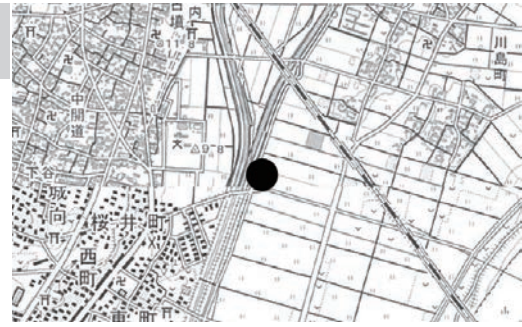
所在地 安城市桜井町地内
(北緯34度55分21秒 東経137度05分58秒)

調査理由 中小河川改良事業(鹿乗川)

調査期間 令和2年6月

調査面積 96㎡

担当者 池本正明・永井邦仁



調査地点 (1/2.5万「安城」)

調査の経過 調査は、愛知県建設局河川課から愛知県民文化局を通じた委託事業として行なった。調査対象地は、亀塚遺跡北方の昨年度新たに事業用地となった4か所の区画(総計6,390㎡)で、2m×3mのテストトレンチ(TT)を総計16か所設定して遺構と遺物を検出するとともに土層の状況を確認した。TTの番号は北からTT01～TT16である。

立地と環境 遺跡は安城市東部の沖積低地に立地し、鹿乗川流域遺跡群の中狭間地区として安城市教育委員会による発掘調査がなされているが、鹿乗川左岸での遺跡の展開やその立地する微高地の形状については不明であった。

調査の概要 TT01～04では、表土と近世耕作土下で厚さ0.1～0.3mの黒褐色シルトがあり、弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗を包含する。同層は鹿乗川流域で広範に認められるが、当該地点では比較的厚いのが特徴である。同層下は黄褐色系シルトの基盤層で、その上面で遺構(TT01の竪穴状遺構01SI、TT04の溝09SDなど)を検出した。

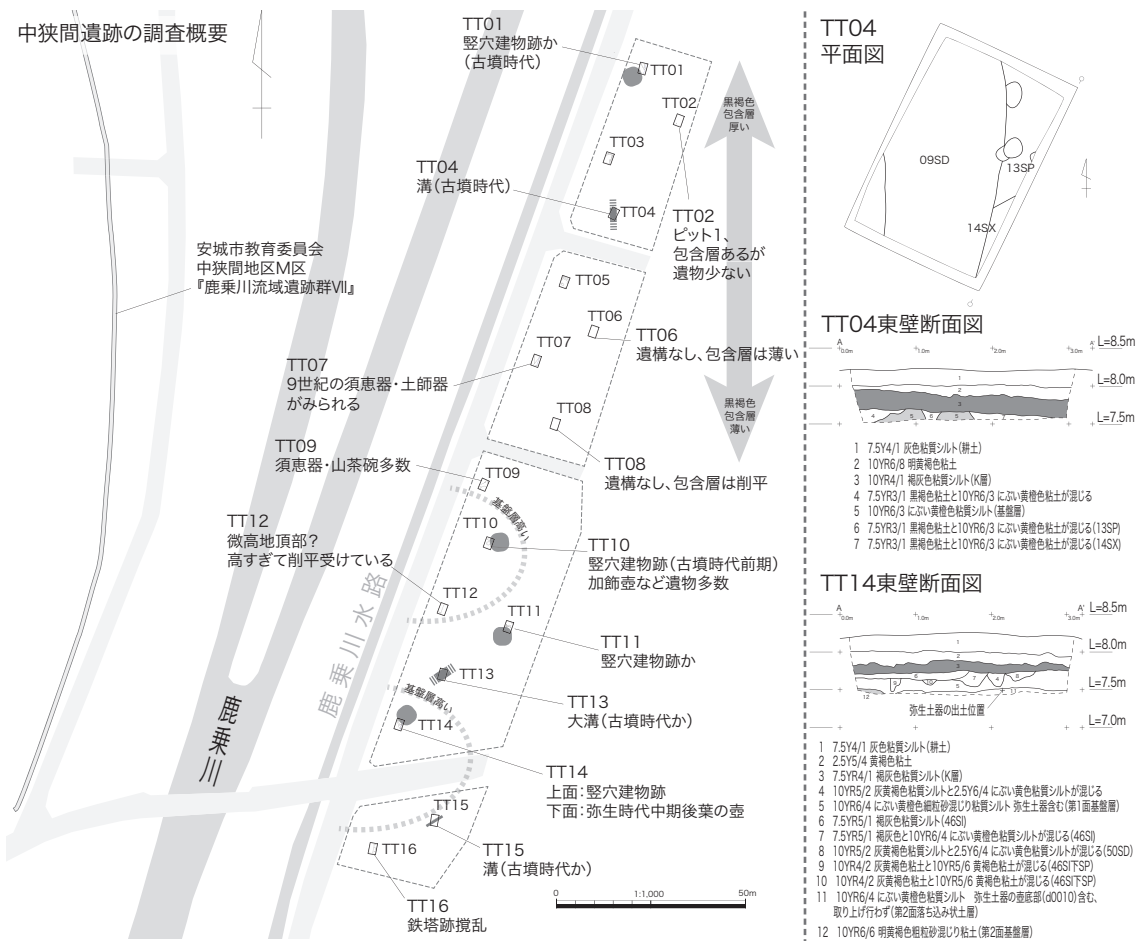
TT05～08では、先述の黒褐色の遺物包含層が希薄になるが、基盤層の標高が7.6m以上と周囲より高くなっていることから、後世の削平を受けやすかったものと思われる。TT07の不明遺構27SXからは9世紀後半の須恵器碗が出土している。なお、TT02・06・08は調査対象地の東寄りに設定したが、これらのTTでは遺構・遺物ともに希薄になる。このことから、当該地点が集落域の東縁に相当すると考えられる。

TT09～12はさらに基盤層が高く(TT10で標高7.7m)、黒褐色の遺物包含層はほとんどみられないが、TT09では須恵器瓶類と山茶碗類が多数出土し、TT10では竪穴建物跡43SIの西辺を検出した。後者の埋土からは加飾壺や台付鉢などがまとまって出土しており、古墳時代前期と考えられる。TT11では、竪穴建物跡の可能性のある42SXを検出した。TT12は基盤層の砂質が強いことから、微高地の最頂部に相当するとみられる。

TT13は凹地とみられ、南西から北東方向の溝45SD(深さ約0.5m、土師器出土)を検出した。その南側のTT14は再び基盤層が高くなる。遺構面は2面以上あり、上面では竪穴建物跡46SI(古墳時代以降)を検出した。その基盤層となる黄褐色シルト層中には弥生土器が含まれ、上面から約0.2m下で古井式(弥生時代中期後葉)の壺が逆位で出土している。この壺は、出土状況から埋納されたと考えられることから、黄褐色シルトが掘方の埋土となる下面の遺構が存在することが指摘できる。

TT15・16はやや凹地となっており、TT15では土師器の出土する溝52SDを検出した。亀塚遺跡の集落とはこの辺りで境界になると思われる。

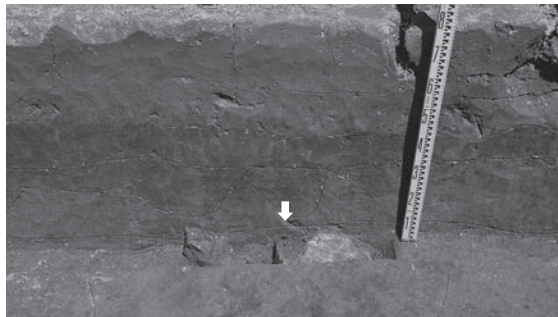
まとめ 以上のように、鹿乗川左岸では微高地は東方へ下り傾斜となっているが、弥生時代後期～古墳時代前期を中心とする集落遺跡が濃密に広がっていることが確認できた。また弥生時代中期以前についても注意すべき点が多いと考えられる。(永井邦仁)



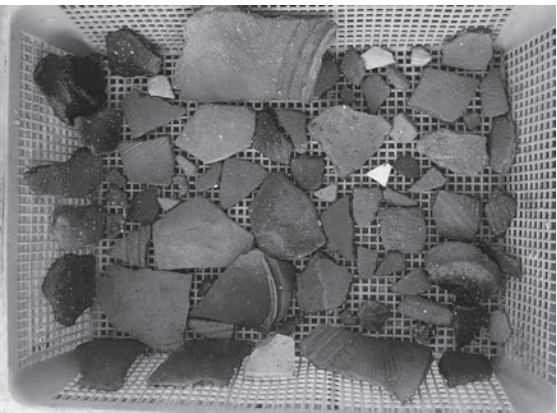
TT04 溝検出状況 (南から)



TT10竪穴建物跡内の遺物出土状況 (東から)



TT14 下面の古井式土器出土状況 (矢印の位置、西から)



TT14 出土遺物 (弥生時代中期～江戸時代)